

## 北海道言語研究会 研究例会報告

2014 年度の研究例会は以下の日程とプログラムで開催された。参加者諸氏の間で活発な議論が交わされた。

・9 月例会 (9 月 26 日 (金) 14:00~17:00; 会場: 室蘭工業大学)

14:00~14:30

橋本邦彦 (室蘭工業大学)

渡島半島東岸部と西岸部における伝統的な漁業関連語彙の比較-第 1 回調査報告-

14:40~15:10

塩谷 亨 (室蘭工業大学)

ポリネシア諸語の動詞的小辞概観

15:30~16:00

Brian Gaynor (室蘭工業大学)

Research into Language 1 and Language 2 Orthography

16:10~16:55

三村竜之 (室蘭工業大学)

アイスランド語のアクセントに関する一考察

・3 月例会 (2015 年 3 月 13 日 (金) 13:00~17:00; 会場: 室蘭工業大学)

13:00~13:45

徳永光展 (福岡工業大学)

夏目漱石「心」英訳で読む「上 先生と私」-Meredith McKinney 訳の分析-

13:55~14:40

三村竜之 (室蘭工業大学)

アイスランド語のリズムに関する諸問題

15:00~15:45

塩谷 亨 (室蘭工業大学)

サモア語、タヒチ語、ハワイ語における非定型節を導く動詞的小辞の用法について

15:55~16:40

橋本邦彦、塩谷 亨、島田 武、三村竜之 (室蘭工業大学)

せたな町における漁業関連方言語彙調査報告

## 『北海道言語文化研究』投稿規程

1. 『北海道言語文化研究』への投稿は、資格を問わない。
2. 投稿内容は、未発表であり、かつ投稿時に、他の学会等への発表の応募または投稿を行っていないものに限る。
3. 原稿の応募は『WORD』で読める形式のファイル (doc または docx ファイル)と印刷時の体裁確認のための PDF ファイル、もしくは印刷したもの (1部)を提出する。  
宛先:92hashimot@gmail.com
5. 原稿の書式は、スタイルシートに準拠させる。  
<http://www3.muroran-it.ac.jp/hlc/style/index.html> を参照。
5. 本研究会による電子化による公開を、著者が本研究会誌に投稿した時点で許諾したものとする。<http://www3.muroran-it.ac.jp/hlc/journal.html>
6. 締切は各年度の 11 月 30 日とする。
7. 投稿された論文については、2 名の匿名査読者によって査読を行う。
8. 掲載の可否は編集委員会が決定する。
9. 著者による校正は原則として初校のみとする。訂正は誤植に限るものとし、内容の変更は認めない。
10. 印刷費は著者が実費を負担する (印刷費用によって変動あり)。
11. 稿料は払わない。

(2010 年 3 月)

## スタイルシート

- (1)使用言語:日本語もしくは英語。
- (2)原稿:『WORD』で読める形式のファイル (DOC ファイル )と印刷時の体裁確認のための PDF ファイル、もしくは印刷したもの (1部)を提出する。送付時に、WORD のバージョンを編集委員に知らせる。スタイルシートのテンプレートおよびPDF化用のフリーソフトに関しては、本研究会の WEB ページを参照。(URL: <http://www3.muroran-it.ac.jp/hlc/style/>)
- (3)余白(マージン ):上端 30mm 下端 25mm 左端 25mm 右端 25mm。
- (4)行数:37 行。ただし余白を遵守すれば、多少の増減は許容される。
- (5)字数:全角 39 文字または半角 78 文字。ただし余白を遵守すれば、多少の増減は許容される。
- (6)フォント:和文は MS 明朝、MS P 明朝、英文は Times New Roman のみを認める。特殊文字を使用する際には、unicode を用いることとし、その旨について投稿時に編集委員まで申し出る。
- (7)ポイント数および書体 :
- |        |           |                  |      |
|--------|-----------|------------------|------|
| 題名:    | 18 ポイント   | 太字               | 中央寄せ |
| 氏名:    | 14 ポイント   | 太字               | 中央寄せ |
| 要旨:    | 9 ポイント    | 「要旨」という文字のみ太字    |      |
| キーワード: | 10.5 ポイント | 「キーワード」という文字のみ太字 |      |
| 本文:    | 10.5 ポイント |                  |      |
| セクション: | 10.5 ポイント | セクション番号と題は太字     |      |
| 謝辞:    | 9 ポイント    | 「謝辞」という文字のみ太字    |      |
| 注:     | 9 ポイント    | 「注」という文字のみ太字     |      |
| 参考文献:  | 9 ポイント    | 「参考文献」という文字のみ太字  |      |
- (8)タイトルおよび氏名:和文と欧文の2種類で書く。本文と同じ言語を先にする。和文の姓と名の間には全角の空白を 1 つ入れる。欧文の氏名は姓をすべて大文字にする (例:John BINTLET)。和文と欧文それぞれの間に 1 行の空白を入れる。
- (9)ページ数:原則として図表を含め、20 ページ以内とする。
- (10)要旨:日本語でも英語でも可。場所はタイトルの下に 1 行空白を入れた後。分量は日本語の場合 400 字以内、英語の場合は 200 語以内。左右のインデントは全角 2 文字(半角 4 文字)、両端揃えにする。
- (11)キーワード:5 つ程度のキーワードを要旨の下に 1 行あけて書く。左右のインデントは全角 2 文字(半角 4 文字)。
- (12)セクション (節):セクションの番号は 1 から始める。セクションおよびサブセクションの番号の形式は問わないが、一貫した書き方になっていること。
- (13)段落:両端揃えにすること。段落の最初の文字の下げ方等の形式は問わないが一貫した書

き方になっていること。

(14)注:通し番号をつけて脚注もしくは後注とする。通し番号の形式に指定はないが、一貫していることと、番号が行頭に来ないようにすること。ただし過去における研究発表情報等はタイトルの後ろに\*(半角アスタリスク)を付加し、注の先頭で言及する。

(15)参考文献:文献は本文の後ろ、後注がある場合には注の後ろに付加する。形式は問わないが、一貫した書き方になっていること。

(16)執筆者紹介:①氏名、②所属機関・部署、③メールアドレス、④URI、⑤電話番号等を論文末に付加する。①は必須。②以降は任意で、その他の事項も付け加えることができる。現在の所属機関がない場合には、元～でも可。

(2014年2月6日改定)

## 雑誌の作り方\*

----- 1行あける-----  
ジョン ビントレット (邦文)  
----- 1行あける-----

### How to Make a Journal

----- 1行あける-----  
**John BINTLET**  
----- 1行あける-----

**要旨** : 本稿では、雑誌の作り方について○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○  
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○

----- 1行あける-----

**キーワード** : 雑誌 校正 ○○○○ ○○○○

----- 1行あける-----

#### 1. (セクションの題)

本文はこちらから○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○  
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○  
○○

#### 1.1. (サブセクションの題)

○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○  
----- 1行あける-----

#### 2. (セクションの題)

○○○○○○○○○○○○  
----- 1行あける-----

#### 謝辞

\* ○○  
----- 1行あける-----

#### 注 (脚注でも可)

<sup>1</sup> ○○  
----- 1行あける-----

#### 参考文献

○  
----- 1行あける-----

#### 執筆者紹介

氏名 :

所属 :



## How to Make a Journal\*

----- 1行あける-----

**John BINTLET**

----- One line inserted -----

### 雑誌の作り方

----- One line inserted -----

ジョン ビントレット

----- One line inserted -----

**Abstract** : ○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○  
○○○○○○○○○○

-----One line inserted-----

**Key words** : ○○○○ ○○○○ ○○○○○

----- One line inserted -----

#### 1. (Section Title)

○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○  
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○  
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○  
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○

#### 1.2. (Subsection Title)

○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○

----- One line inserted -----

#### 2. (Section Title)

○○○○○○○○○○

----- One line inserted -----

**NOTES (or foot notes available)**

(\*) ○○

(1) ○○

----- One line inserted -----

**REFERENCES**

○○○○○○○○○○

----- One line inserted -----

Author's Information: (Name is required; the others optional.)

Name: John Bintlet

Faculty, Institute or Company: Muroran Institute of Technology

Email: jbintlet @mm.muroran-it.ac.jp





## 編集後記

サモア語を始めるきっかけとなったのは何ですかと聞かれることがあります。それ程興味深い理由はないので、いつもは、「特に理由はありません、たまたまです」と答えるのですが、たまに気が向くと、正直に「実はある一冊の本との出会いからです」などと答えて後悔することがあります。もし、その一冊の本と言うのが、例えば、世界に衝撃を与えたマーガレット・ミードの『サモアの思春期』や、今でも世界中で愛読されているベストセラー『パパラギ』のようなものであれば、私もここぞとばかりに得意げに答えるでしょうし、尋ねた人も「なるほど、そうでしたか」と納得するでしょう。しかしながら、私の場合はそのようなたいそうなものではないのです。実際、私がサモア語を始めた時点では、サモアのことは全く知らず、もちろんサモアという国を見たこともありませんでした。学部学生の頃は、三省堂、紀伊国屋、丸善などの洋書売り場に行きいろいろな言語の参考書や辞書を立ち読みして時間をつぶすことが多くありました。かといって、目についたいろんな言語の参考書や辞書を買いたるような経済的な余裕はなく、ただ、ぱらぱらとめくり、「ほお、こんな言語もあるのか」と眺めるだけで何となくマニアックな幸福感を得ていたものでした。ある日、丸善の洋書売り場で有名な語学自習書のシリーズの *Teach Yourself Samoan* というサモア語の自習書が目にとまりました。その時も、「はあ、こんな言語があるのか」と思っただけで買うには至りませんでした。その後も丸善に行くたびに、なぜか、その本が目にとまりました。要するにだれにも買われずに売れ残っていただけなのですが、何か、私に買われるのを待っているかのような気がして、また、洋書としてはそれほど高い本ではなかったこともあり、買う決心をしました。こんな本誰が買うのかというような本をレジに持っていくのは毎度のことながら気恥ずかしいものではありませんが、それをこらえてなんとか購入し、家に持ち帰りました。その本は今でもぼろぼろになって教員室の本棚のサモア語コーナーの一面に鎮座しています。今思うと、あの時、丸善がこんなほとんど売れそうにないような本を仕入れてなければ、或いは、別の言語マニアがこの本を先に入れてしまったら、私は今何語をやっていたのでしょうか、もしかしたら、言語学などやめていたかもしれません。

今年もそれぞれ様々な専門分野を持つ研究者の方々から投稿いただき、バラエティに富んだ内容の論文集を刊行することができました。投稿者の方々はそのそれぞれの研究分野とといったいどのような出会いがあったのでしょうか。

T.S.